

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00224

研究課題名(和文)1960年代後半の日本における表現文化と市民運動の交差に関する文化論的研究

研究課題名(英文)A Cultural Study on the Intersection of Expressive Culture and Civic Movements in Late 1960s Japan

研究代表者

粟谷 佳司(Awatani, Yoshiji)

立命館大学・衣笠総合研究機構・プロジェクト研究員

研究者番号：90411115

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、市民運動と交差する芸術文化の表現者たちについて、日本の1960年代後半を中心としながら1970年開催の日本万国博覧会(大阪万博)へ至る表現活動の意義と課題から考察した。研究を通じて、表現者たちが社会的な問題を表現に取り込みながら活動を行うことで、芸術や文化が社会的な関わりの中で形成されていたことをフォークソング運動と大阪万博をめぐる表現者たちの実践と時代状況を検証した。特に60年代後半の鶴見俊輔の『限界芸術論』とその応用としてのフォークソング運動から、鶴見が関わった市民運動とも交差した大阪万博に至る状況を、知識人、関係者の活動や言説から、文献や資料、インタビュー調査などから分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、戦後日本の芸術における表現と文化について、1960年代後半から70年ごろの活動に焦点を当てて考察するものであり、特に音楽文化であるフォークソング運動と日本万国博覧会(大阪万博)に関わった表現者たちが、どのように社会的な問題を活動に取り入れたのか、そこで同時期の市民運動とどのように交差したのかということについて考察した。本研究は、日本の芸術や文化イベントにおいて、表現活動がどのように作品として結実し、そのような表現が世界的な観点から日本の文化としてどういう意味を持つのか、という資料となるものである。このような研究は、これからの日本文化の研究においても学術的意義があるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study examines the significance and challenges of artistic expressions intersecting with civic movements, focusing primarily on Japan's late 1960s through the 1970 Osaka Expo. Through this research, the activities of artists who incorporated social issues into their expressions are explored, highlighting how art and culture were shaped within societal contexts. The study explores the practices of artists involved in the folk song movement and the Osaka Expo, intersecting with civic movements associated with Shunsuke Tsurumi's "Theory of Marginal Art(Genkai geijutsu ron)" in the late 1960s, analyzing the activities and discourses of intellectuals and key persons through literature, documents, and interview surveys.

研究分野：文化社会学

キーワード：表現文化 フォークソング運動 日本万国博覧会(大阪万博) 鶴見俊輔 市民運動

1. 研究開始当初の背景

本研究は、鶴見俊輔の文化と運動に関する思想を切り口に、市民運動と芸術文化の表現者たちとの相互媒介・影響を掘り起しながら、1960年代後半から70年ごろまでの戦後日本社会における表現の位置・役割を、文化研究、歴史社会学の方法から再検証するものである。

この時期の表現領域においては、様々な行為者や実践活動が社会や文化と複合的に関係しており、個別の文化領域に着目するだけでは限界がある。求められるのは、当時の横断的な表現領域を考慮に入れた、複合的な社会と文化との交差を解明する研究であろうと思われる。

本研究が、とりわけ鶴見俊輔を中心とする知識人や批評家の言説が重要だと考えるのは、鶴見の思想は専門の哲学のみに限らず、表現の担い手・作り手、さらには市民運動の当事者たちと相互影響していたからである。その際、思想と文化の交差過程に注目することは有効である。また鶴見の議論は、芸術や表現文化の領域を横断的に捉えており、現代でも研究において参照されている。そして、1960年代の芸術文化の表現者たちは、時代状況と交差して市民運動と関係することで、自身の表現の中にその活動を取り入れていたのである。

2. 研究の目的

本研究では、鶴見俊輔をはじめとしたキー・パーソンである表現者たちの活動から、市民運動と表現文化が交差することで、芸術や文化、社会にどのような影響を与えていたのかを考察することを目的とした。研究では、鶴見俊輔の言説と活動を中心として、鶴見が関わった市民運動と芸術文化・表現領域がどのように相互媒介・影響したのかということ掘り起し、1960年代後半から70年ごろの文化の戦後における役割とその後の影響を文化研究、歴史社会学の方法から再検証した。

3. 研究の方法

本研究は、鶴見俊輔の文化と運動に関する思想の市民運動と芸術表現に関連するキー・パーソンへの影響を分析し、1960年代後半から70年ごろの時代と表現の位置・役割を考察することを目的とした。

研究内容としては、

(1)この時期に、鶴見の思想と行動が文化の領域といかに交配し、複合的な文化実践が展開されたのか。

(2)これらの文化表象が、その直接的な担い手といかなる相互影響をもたらしたのか。

(3)鶴見の関わった「ベ平連」(ベトナムに平和を！市民連合)という市民運動と、そこに関わった知識人、芸術家たちをめぐる多様な文化表現を比較し、表現者たちがいかなる体験を経たのかに注目しながら、時代と表現が交差することの意義について検証した。

研究方法としては、

(1)映像、音楽、芸術などの文化領域を横断的に捉えるための、資料・言説や作品の分析。

(2)ライフヒストリー・インタビューによる、文化芸術運動に関する調査。

(3)芸術文化の理論的な分析として、文化研究、文化社会学におけるアート・ワールド論の方法の整理と、理論の事例への応用から研究を達成することを目的とした。

4. 研究成果

本研究では、鶴見俊輔の著作の全体的な検討と著作集などへの未収録論考を積極的に追跡し、鶴見と関わった、片桐ユズル、中川五郎を中心とした関係者へのインタビュー調査を行うことで、市民運動におけるフォークソングの位相を検証した。関係者に対するインタビュー調査から、文献や資料だけでは明確ではなかった実践活動が、どのように協同、連携されていたのかを考察した。関係者への聞き取り調査には、社会調査におけるライフヒストリー研究の方法を用いながら、当事者の発言と資料とを突き合わせ事実を確認する作業を行った。ライフヒストリー調査を中心とした聞き取り調査は、政治学や美術史などの研究分野においても行われており、戦後日本文化の研究における意義とともに考察した。

そして、「ベ平連」と関連する文化領域と前衛芸術家たちとの交差をめぐる状況について、岡本太郎、横尾忠則、粟津潔といった芸術家たちが著した著作、回想録などを分析した。ここから、前衛芸術家たちが多数関わった70年開催の日本万国博覧会(大阪万博)における実践についても、資料や文献から調査・分析を行うことで、時代状況とどのように交差しながら芸術実践や作品が表象されていたのかということ考察した。

本研究では、戦後日本文化と社会について通時的変容についても視野に収めながら、60年代後半からの文化の横断的で複合的な社会関係について共時的な位相を検証した。そのための調査として、国立国会図書館、大阪府立中之島図書館、立教大学共生社会研究センターでの関連する文献や資料の収集を行い、また表現文化の実践者たちの音源や映像資料への内容分析を行った。研究では、文化社会学や現代文化研究による分析の方法を用いながら、表現者たちの作品がどのようなメッセージを発しているのかについて考察した。そして、表現文化において表現者た

ちがどのような思想、文化的な位相を形成していたのかについて、関連する雑誌(美術、デザイン、ポピュラー音楽関連雑誌)や、片桐が中心になって編集・発行していたミニコミ『かわら版』の内容分析から、表現の複合的な領域を考察した。

本研究は、鶴見における文化論の著作である「限界芸術論」の音楽文化への影響と、人間関係のネットワークについて考察するための事例として、1960年代半ばから70年ごろの日本におけるフォークソング運動を取り上げた。特に、鶴見の活動のネットワークのなかで交差するフォークシンガーや批評家の活動から、「限界芸術論」が音楽文化においてどのように応用されていたのかについて検証を行い、フォークソング運動の文化表現としての意義について考察した。

これまで、関西を中心としたフォークソング運動、あるいは音楽を中心とした表現文化と鶴見との関係については、正面から分析されてきているとはいえない。しかし、鶴見の議論はフォークソング運動に関わった人々によって受容されて読み替えられ、文化的なネットワークにおいて展開されて行った。鶴見はこれまで、何度か流行歌について語っているが、鶴見の「限界芸術論」における音楽文化の問題については言及されることがほとんどなかった。しかし研究から、フォークソング運動に関する言説や活動に鶴見の「限界芸術論」が影響を与えており、そのことが運動の領域のある部分を形成していたということを指摘した。そして本研究では、「限界芸術論」の内容を検証しながら、フォークソング運動を政治や生活の領域と関わりながら、文化産業とは一定の距離を保つことで展開した文化運動として考察した。また一方で、その実践が特に「大衆芸術」に入り込んでいく「流行歌」や「替え歌」の問題と連なるものとして分析した。

また、本研究においては、キー・パーソンである知識人、ミュージシャンや批評家と、その表現されたものである音楽や歌詞、音楽について書かれた文書や資料に注目した。特に、音楽文化との関係において、当時の日本社会においてフォークソングがどのような文化的、社会的な位相にあったのか、それが鶴見の議論とどう関わるのかについて、レコードなどの音源に残されたイベントや集会の様式、著作には収録されていない文章などを積極的に調査することで、時代と表現者たちの活動を立体的に捉える視座により考察した。そして、このようなフォークソングを考える視座としては、フォークソングを運動として捉えていた人々の協同やキー・パーソンの活動から考察した。その事例として、片桐を中心とした関係者の活動を、ライフヒストリー・インタビューも活用しながら分析した。

研究では、市民運動と表現文化の関係について、「ベ平連」という運動体の活動において、芸術家や文化・知識人たちが交差していたということに着目して考察を行った。その事例としては、『ベ平連ニュース』に中川や片桐などフォークソング運動の関係者の文章が掲載されていたということや、あるいは「ベ平連」の意見広告のために岡本太郎が書いた「殺すな」の文字のように、「ベ平連」において芸術家と連携、協同するような象徴的な活動が行われていたことを取り上げた。そして、「ベ平連」はその運動のなかに、芸術文化や音楽が実践として使用される領域を作りながら活動を行っていたということを指摘した。市民運動において文化的な活動実践が行われていたということは、本研究において特に重視する側面である。そして、フォークソングによる音楽文化との関係については、片桐らキー・パーソンの論考や、市民運動の集会などにおける人々の活動から分析した。併せて、フォークソング運動において市民運動と音楽実践が交差する際の、素人による活動の意義についても指摘を行った。

そして本研究では、鶴見の業績から、「大衆」や「市民」の問題について考察を行った。鶴見における「大衆」「市民」という概念は、彼の思想と行動、活動の中で常に存在していた。そして、このような存在を捉えるのに、市井三郎が鶴見に言及しながら考察していた、「ひとびと」という概念を参照しながら分析を行った。市井は、鶴見の「ひとびと」を「ひとびとの哲学」の研究から取り出しながら、「大衆」を「ひとびと」とイコールなものとして論じていた。研究では、現代の文化環境の中で表現文化を考えるときに、鶴見の思想を参照しながら活動する存在を捉えることの意義について考察を行った。

また、1960年代後半からの社会状況と関わった表現者たちの行動について、1970年に開催された大阪万博における活動実践から考察した。大阪万博では、その後の日本の芸術文化において展開されるような、芸術家たちの活動を見ることが出来るのである。そのような実践を、岡本太郎、武満徹、横尾忠則、湯浅譲二、粟津潔らキー・パーソンの活動から考察した。併せて、大阪万博に参加することへの表現者たちの葛藤や、パビリオンの設置過程と芸術として表現された作品の内容分析などの検証を行った。そして、表現者たちがどのように時代の諸問題と向き合いながら芸術活動を行っていたのかということ、戦後日本における芸術表現と社会との関わりから考察した。

併せて、研究の方法論に関して、現代文化研究におけるいくつかの概念(「表現文化」「空間」「公共圏」「ユーザー」など)の本研究への応用について検証を行った。そして、文化研究、文化社会学におけるアート・ワールド論の理論と方法論の分析を行いながら、本研究の表現文化研究における現代的な意義と課題について考察を行った。

本研究の研究成果は、『表現の文化研究：鶴見俊輔・フォークソング運動・大阪万博』(新曜社、2023年刊行)を中心とした業績として発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 粟谷 佳司 | 4. 巻 25 |
| 2. 論文標題 書評 東谷護(編著)『復刻 資料「中津川労音」：1960年代における地域の文化実践の足跡を辿る』 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 ポピュラー音楽研究 | 6. 最初と最後の頁 90～92 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11385/jasmpms.25.0_90 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 粟谷 佳司 | 4. 巻 25 |
| 2. 論文標題 戦後日本の表現文化とキー・パーソン：片桐ユズルとフォークソング運動 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 同志社社会学研究 | 6. 最初と最後の頁 83～95 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14988/00028265 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 粟谷佳司、太田健二、石川琢也、有國明弘、川上幸之介 |
| 2. 発表標題 ワークショップ：表現文化としての音楽文化 ポピュラー音楽とテクノロジー、サブカルチャー、アート |
| 3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第34回大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 粟谷佳司 |
| 2. 発表標題 1960年代後半の日本におけるフォークソング運動についての文化研究 片桐ユズルの活動を中心に |
| 3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第33回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 粟谷佳司、馬場伸彦、平石貴士 |
| 2. 発表標題 ワークショップ：戦後音楽文化史再考 フォーク、ロックミュージックのトポロジー |
| 3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第31回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 粟谷佳司、太田健二、平石貴士 |
| 2. 発表標題 ワークショップ：戦後日本における表現としての音楽文化 |
| 3. 学会等名 日本ポピュラー音楽学会第30回大会 |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 粟谷佳司 |
| 2. 発表標題 日本における市民社会の戦後的言説：鶴見俊輔を中心に |
| 3. 学会等名 第23回進化経済学会名古屋大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|--------------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 粟谷佳司 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 新曜社 | 5. 総ページ数 247 |
| 3. 書名 表現の文化研究：鶴見俊輔・フォークソング運動・大阪万博 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 粟谷佳司 | 4. 発行年 2018年 |
| 2. 出版社 ハーベスト社 | 5. 総ページ数 221 |
| 3. 書名 限界芸術論と現代文化研究：戦後日本の知識人と大衆文化についての社会学的研究 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|